

死生観に関する教育実践の試行

村 上 信^{*1} 宮 下 榮 子^{*2}
濱 野 強^{*3}

1. はじめに

社会福祉士，介護福祉士，看護師を始めとして高齢者ケアに関わる専門職の死生観をいかに育てるかが課題となっている（村上，他 2012；宮下 2009；石田，他 2007）。そうした中で筆者らは，学生の死生観の現状を明らかにしてきた。その結果，学生の死生観は，自身のライフイベントや震災等の社会的な事象により影響を受けることが明らかとなった（村上，他 2012）。そして，単に視聴覚教材を活用した一時的な教育にとどまらず，「死」を現実の出来事として受け入れることが可能となる包括的な教育内容を合わせて実践することで学生の死生観がより深まることが考えられた（村上，他 2013）。

以上の知見を踏まえると，学生への死生観教育は，体系的なカリキュラムに基づき実践する必要がある，また，教員から学生への講義形式に加えてグループワーク等を通じ自ら考え，意見を他者に伝える必要があることが考えられた。さらには，死を1人称（自分の死），2人称（身近な人の死），3人称（職務上の死）と区別して考えることが可能となるよう教育内容を検討することが必要であることも浮き彫りとなった。

そこで，本研究では，学生の死生観の理解を意図とした教育プログラムを作成し，その実践と評価を通して有用性を明らかにすることで，今後の死生観教育の基盤となる基礎的知見を提示することを目的とした。

2. 方 法

(1) 調査方法

本研究では，平成25年5月～7月にかけて介護福祉士養成の専門学校で死生観教育の実践

^{*1}総合福祉学部 教授，^{*2}国際医療福祉専門学校 七尾校 介護福祉学科 学科長，

^{*3}島根大学研究機構戦略的研究推進センター 専任講師

を試みた。授業方法は、講義形式・グループワーク形式（計16時間19単元）であり、内容は表1に示す通りである。

表1 教育内容

テーマ	
1	死をどのように考えるか（インドベナレスの死の家）
2	死と社会（戦争と死）
3	終末期に関する用語解説
4	死を迎える場所（孤独死、ホームレスと死）
5	老人漂流社会
6	親を家で看取る（在宅介護クライシス）
7	施設における看取り
8	医療保険と介護保険からみる看取り（重症加算・看取り加算）
9	施設における終末期ケアと臨終期の対応
10	臨終期の身体の変化と対応
11	臨終期の環境整備とケア
12	キューブラロス・佐々木氏の死への段階
13	死期の7つの不安
14	死と希望・事例検討
15	エンゼルケアの技法
16	グリーフケア・残された家族支援
17	死後のカンファレンス
18	終末期の食事（意味づけと）演出
19	まとめ

(2) 死生観評価

死生観は、先行研究で信頼性、妥当性が示されている尺度を用いた（平井，他 2000）。本尺度は、死後の世界観（4項目）、死への恐怖・不安（4項目）、解放としての死（4項目）、死からの回避（4項目）、人生における目的意識（4項目）、死への関心（4項目）、寿命感（3項目）の7つの下位尺度から構成されている。学生には、「当てはまる」から「当てはまらない」の7つの選択肢より回答を求めた。そして、分析では「当てはまる」を7点として「当てはまらない」が1点になるよう得点化した。

(3) 分析方法

上記の死生観尺度を用いて授業前、授業後に自記式のアンケート調査を実施した。そして、教育プログラムの有用性の検証については、Wilcoxon符号付順位検定を行った。なお、解析には、授業前、及び授業後のアンケートに回答した者（7名）のデータを用いた。統計解析では、IBM SPSS Statistics 20を使用した。

3. 結果

分析対象者の特性を表2に示した。年齢分布は、18歳が1名、19歳が2名、22歳が2名、23歳が1名、24歳が1名であった。性別は、すべて男性（7名）であった。特定の宗教を信仰している学生が2名（28.6%）であった。1年以内に親しい人の死を経験したと回答した学生は2名（28.6%）であった。

表2 分析対象者の特性

	人数(名)	%
性別		
男性	7	100.0
女性	0	0.0
年齢		
18歳	1	14.3
19歳	2	28.6
22歳	2	28.6
23歳	1	14.3
24歳	1	14.3
特定の宗教		
信仰している	2	28.6
信仰していない	5	71.4
1年以内の親しい人の死		
経験している	2	28.6
経験していない	5	71.4

表3には、授業前後での死生観の変化を示した。その結果、「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」において有意傾向（ $0.1 < p < 0.05$ ）であるが差を認めなかった。その一方で、「死後の世界観」「死からの回避」「死への関心」「寿命感」では、有意な差を認めなかった。

表3 死生観の下位尺度別得点

	授業前			授業後			有意確率
	人数	平均値±標準偏差	中央値	人数	平均値±標準偏差	中央値	
死後の世界観	7	14.5±6.2	16.0	7	17.4±4.2	18.0	0.176
死への恐怖・不安	6	22.3±5.6	22.5	6	19.1±6.4	20.0	0.080
解放としての死	7	12.2±6.6	12.0	7	14.7±8.2	16.0	0.066
死からの回避	7	16.1±6.5	17.0	7	15.4±7.5	17.0	0.799
人生における目的意識	7	14.2±5.1	14.0	7	15.0±5.0	16.0	0.096
死への関心	7	13.2±4.8	14.0	7	14.4±5.3	16.0	0.343
寿命感	7	7.5±7.1	3.0	7	11.8±7.8	14.0	0.104

注)「死への恐怖・不安」では、無回答の学生（1名）を分析から除外した。

4. 考 察

筆者らは、先行研究において死生観の現状とその理解に有用と考えられる教材の検討を進めてきた(村上, 他 2012; 村上, 他 2013)。そこで、本研究では、授業実践を通じた学生の死生観の変化について定量的な評価を行い、今後の死生観教育の基礎的知見を得ることを目的とした。その結果、「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」において授業前後で統計学的な差を認めた。

下位尺度の「死への恐怖・不安」は、「死ぬことがこわい」「自分が死ぬことを考えると、不安になる」「死は恐ろしいものだと思う」「私は死を非常に恐れている」から構成されている。授業前の平均点が 22.3 ± 5.6 点であり、授業後は 19.1 ± 6.4 点へと低下していた。その理由としては、授業を通して学生が死を客観的に捉えることができるようになったと推察される。すなわち、死はライフサイクルの一部であることを学生が理解し、その結果、死への恐怖・不安が緩和されたことが考えられる。また、本研究の対象者が20歳前後と若い集団であることから1人称(自分)の死が自身の関心の中心であったと考えられるが、授業を通して2人称(身近な人の死)、3人称(職務上の死)へと視野が広がったものと推察される。

下位尺度の「解放としての死」は、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」から構成されている。授業前の平均点が 12.2 ± 6.6 点であり、授業後は 14.7 ± 8.2 点へと上昇していた。その理由としては、学生が死を単に終わりとして捉えるのではなく、その人が過ごしてきた(背負ってきた)一つの終着地点であるとともに、解放されることによる新たな希望という視点で死を認識できるようになったためと推察される。たとえば、終末期の患者が死を迎えることは、これまでの闘病生活から解放され、言い換えれば、新たな希望(世界)を享受することができたという文脈の中で死を捉えることができる。このように、各人の人生における死を学生が考察する能力を身に着けることができたと考えられる。

下位尺度の「人生における目的意識」は、「私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している」「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている」「未来は明るい」から構成されている。授業前の平均点が 14.2 ± 5.1 点であり、授業後は 15.0 ± 5.0 点へと上昇していた。その理由として、死生観教育を通して、自身が専門職としてどのように利用者・患者の死と向かい合うべきであるのか、どのような役割を果たすべきであるのかという点が明確になったためと推察される。上述の通り、本研究の対象者が20歳前後であることから、人生における明確な目標、専門職としての誇りや役割を十分に認識することが難しいことが推察される。そうした中で、専門職として必ず直面する死について教育を受けたことにより自身の

目的が明確化されたものと考えられる。

本研究の限界は、調査の実施が1つの教育機関、小集団に限られている。今後は同様の教育実践を他の教育機関において行い、教育プログラムの精緻化・一般化を図る必要がある。また、死生観教育は、多くの授業時間数を要する。したがって、現行のカリキュラムとの整合性の中で、どのように展開していくかについても更なる検討が求められる。

5. おわりに

本研究では、死生観の醸成を意図した教育プログラムの実践とその有用性の評価を行った。その結果、死生観の中でも「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」において変化を認め、教育プログラムの一定の有用性が認められたことが考えられた。

謝 辞

本研究は、平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「大学の学部教育における終末期ケアに関する社会福祉士教育の実証的研究（研究代表者：村上信）」における研究成果の一部を取りまとめたものである。

参考文献

1. 村上信, 佐藤真由美, 宮下栄子, 濱野強, 藤澤由和. 社会福祉士養成の学生の死生観に関する意識調査. 淑徳大学研究紀要. 46. 87-94. 2012.
2. 宮下栄子. 介護福祉士養成教育における「介護観」構築のための「終末期介護」教育の実践報告—学生の意識調査による検証—. 新潟医療福祉学会誌. 9. 20-24. 2009.
3. 石田順子, 石田和子, 神田清子. 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要. 18. 109-115. 2007.
4. 村上信, 濱野強, 佐藤真由美, 宮下栄子, 藤澤由和. 社会福祉士養成の学部教育の在り方に関する検討：死生観調査を通して（第2報）. 47. 19-25. 2013.
5. 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 森川優子, 柏木哲夫. 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—. 死の臨床. 23. 71-76. 2000.

A Preliminary Study of Educational Practice and Attitudes to Death

MURAKAMI, Makoto

MIYASHITA, Eiko

HAMANO, Tsuyoshi

The aim is to examine an effectiveness of educational practice of death attitude. We conducted a statistical analysis of the data for 7 students. Our results show that specific domain of death attitude has been improved. Further studies are needed to understand how to improve remained domain of death attitude.